

関東大震災の時 起きた悲劇



皆んなで選んだ
今月の秀句

我慢だけ増える老後の闇深し
増えるのは税とコロナと格差だけ

遠田亀公子
前田大峰

一枚の写真が 政権を大きく 揺るがした

左の一枚の写真が当時の政権を大きく揺るがした。大逆事件と連座した金子文子と朴烈の写真。右の写真は映画になったチラシで、昨年一般公開。DVDにもなっている。詳しくは8頁へ。

消費税 10%に続く新型コロナの猛威。100年ごとに爆発する不思議。天の警告かもしれない。小さなマスクで庶民に我慢を強いる安倍総理。深刻度を増す年配者には奈落のように底が見えない。次の選挙に期待したい。(周)

例会案内

6月例会 **6月25日(木)**
投稿締切 **22日(月)**
課題「報」 3句以内
自由吟 5句以内
自選句、自解筆もよろしく。

◆ 目次

川柳互選	2
課題吟「増」	2
自由吟	3
自選句・おたより	4
エッセイ《北の山、大蔵》	5
おたより	7
ほのぼの川柳	8
立入川柳・穴あき川柳	8
戦争前夜抄【金子文子】 ^⑩	8
シベリア抑留の記録 ^⑪	12
編集後記を兼ねて	16

5月の
川柳互選

◆課題吟「増」

一人3句以内吐

(11人の互選)

- 5 コロナ禍で外出自粛マスク増え 広助
- お隣がすごい増築しやはった ダン吉
- 1 アベノミライ増える不支持に退陣の影 高坊
- 1 アベ与党 不支持増加で 崖淵へ 宏
- 2 増えるのは次の第二波第三波 立東爺
- 2 コロナ禍で詰め込み授業出勤増 広助
- 2 マスク二枚コロナウイルス吹きだまり 大峰
- 2 パソコンの増減グラフで目が疲れ 白眞弓
- 3 狂ってる親族殺傷なぜ増える 未知子
- 3 次々に増えるは税と物価と歳の数 立東爺
- 4 新コロナ 検査増やして 民守れ 宏
- 5 割り増しの選挙資金臭うアベ 林
- 5 コロナ増え病院通い自粛する 徹乗
- 5 天井知らずアベノマスクで増す不信 未知子

- 5 無理矢理に押さえ込んだが増える危機 立東爺
- 6 コロナ禍に人災までもどつと増え ダン吉
- 6 子は増えず借金ばかり増えていく 徹乗
- 6 官邸はお金で動く友増やし 白眞弓
- 6 国民が増えるコロナの尻ぬぐい 亀公子
- 6 増長の鼻息荒くマスクずれ 林
- 7 ハッシュタグ増える怒声に審議諦め 高坊
- 8 増えるのは爆買いツケと消費税 大峰
- 8 コロナ禍で不安と体重増すばかり 北の山
- 8 コロナ禍の後に来そうな増税策 高坊
- 8 ツイッター増 暴走止めし 民の声 宏
- 8 増えるミスその都度他人の所為にする 林
- 8 増税の先に軍拡福祉減 徹乗
- 8 不安です給付金後に増税か 広助
- 9 責任はあっても取らない事例増え 白眞弓
- 10 増長の総理そろそろ崖つ縁 ダン吉
- 10 官邸の撒き餌でゾンビ増殖中 亀公子

15 我慢だけ増える老後の闇深し 亀公子
 15 増えるのは税とコロナと格差だけ 大峰

◆自由吟 (互選)

一人5句以内吐

(11人の互選)

光州^{カシユ}の血民が主なりと官見張る 白眞弓
 同じで安心コロナ対策ほめられた 未知子
 シュレッツダー処理の速さでコロナ策 広助
 初体験古稀過ぎ不安アベコロナ 未知子
 某首相早くタオルを投げ入れよ 白眞弓
 コロナ禍で鍋物過去のものとなる 白眞弓
 1 免疫が出来たか晋三生き延びる 大峰
 1 五月風コロナも安倍も飛んでいけ 大峰
 1 戦争をいうなら使え防衛費 亀公子
 1 いつだって私の出番だと思ふ ダン吉
 1 風向きで黙る帰りに石を蹴る ダン吉
 1 新人の異論に少し身構える ダン吉

2 永遠の 又2週間 蝦夷の地は 宏
 2 粗大ゴミにだけはなるなよ青い星 ダン吉
 2 米中でコロナ争う覇権主義 大峰
 2 アベ野望「朕は国家」なり私物化へ 宏
 2 黒川氏マージャン店をオープンね！ 宏
 3 検察のテッペンから博徒すり落ちる 大峰
 3 うっかりと三密越えた酒の席 広助
 3 寸志かな嘘でなかつた給付金 広助
 3 議事堂でアベノマスクは総理だけ 立東爺
 3 賭けマージャン天罰下る安倍政権 北の山
 3 コロナ禍も頭検察保身だけ 徹乗
 3 著名人抗議の声に我嬉し 高坊
 3 言い分があれば聞こうと凄まれる ダン吉
 4 そろそろか安倍の首飛ぶ匂いする 高坊
 4 香港も日本も民主主義壊れ 徹乗
 4 賭けマージャン政権の思惑吹き飛ばす 高坊
 4 テッペンに据える博徒が足を出し 大峰

- 4 政権の暴走止める民の声 林
- 4 給付金書類づくりでもうアウト 北の山
- 4 モリカケで花見する舟沈む川 白眞弓
- 5 肝入りのマスクにケチが絡みつく 亀公子
- 5 コロナ禍で無能が露呈する首脳 徹乘
- 5 ああ無残切り捨て御免の世をつくる 林
- 5 検察の 落ちし偶像 因はアベ 宏
- 5 崖つぷち給付乱発ワル足掻き 未知子
- 5 検事長に賭けた閣議の大チョンボ 林
- 5 大企業内部留保をいつ使う 広助
- 6 見張り合う社会再び日本人 徹乘
- 6 コロナ禍で話題にならない五輪の火 立東爺
- 6 コロナより先に退治だ安倍政権 北の山
- 7 肝入りのマスク閣僚誰もせず 亀公子
- 7 感染が収まったところ来たマスク 徹乘
- 7 総長になりそこねました牌の味 立東爺
- 7 政権の賞味期限がきています 広助

- 7 政権の打つ手は常に違憲策 林
- 7 アベマスク鼻と口とで二枚要る 立東爺
- 8 白たすきかけて縫います布マスク 白眞弓
- 8 貧困を隠して生きる子のつらさ 林
- 8 官邸の巨悪を守る検事たち 立東爺
- 8 非正規へコロナ失業吹き荒れる 亀公子
- 9 コロナ禍で改憲こっそり顔を出し 宏
- 10 立ち並ぶ汚染タンクの巨大墓地 亀公子

連作・自選句・エッセイ

◆自選句 中野 林

- 布マスク「天下の愚策」と人は言う
- 浅知恵のマスク二枚でベロを出す
- 布マスク歴史に名前残しそう
- ウイルスに頓珍漢と嗤われる
- 品名に「失笑マスク」と附記があり
- 情けなしマスク二枚の手柄顔

政権はマスク二枚で墓穴掘る

◆自選句 前田大峰

老人に抱きついて来る新コロナ

破廉恥検事退職金ガツポリと

コロナの跡追いかけて来る大恐慌

屍を積んでコロナ去って行く

安倍カジノ三幕目は博徒出し

◆エッセイ 川柳の悩み 金石北の山

昨年渡辺さんからお声掛け頂いて和川柳の会に入
れて頂き、七十歳を越えて初めて自分で川柳なるも
のを何句か作っています。最近自分で気づいたこ
とがあります。それは、自分自身が川柳の何たるか
を全く知らないという事です。

私が川柳について知っていることは、柄井川柳と
いう人の名前と、いま世の中で起こっていることを

風刺を効かせて表現するのかな、という事ぐらいで
す。

そもそも私と川柳との出会いは、昭和三十三年私
が小学校4年生ぐらいの時、田舎の郵便局に勤め
ていた父が川柳に凝りだし、毎日のようにその批評
をさせられた時からでした。

父の作る川柳は、時にはやんわりと政治批判もあ
りましたが、大部分はほのぼの川柳だったと思いま
す。そんな中で、私が今でも覚えている句が2句あ
ります。

一つは、当時家で購読していた「家の光」という
農家の雑誌で、その川柳欄に、『鉛筆をカマでけずつ
て名月や』という句で、中秋の名月のころ農家の主
人が夕暮れに帰宅して、きれいな名月を見て、いて
もたつてもおられず、家の中にいる子どもか誰かを
呼んで鉛筆をもつてこさせ、腰に差していたカマで、
急いで芯を整えて「名月や…」と、情景と（この場

合俳句かと思いますが）、さあ作るぞという作者の思
い、意気込みが伝わってきて、本当にいい句だと思っ
たのと、もう一句は、父から教えてもらった鶴彬の『手
と足をもいだ丸太にして返へし』です。

これは本当に衝撃的でした、と同時にへこれがほ
んとの川柳か」と思いました。

こんな鋭い句はとても自分には作れない、とも思
いながら今日まで川柳を忘れて過ごしてきました。

今後はより客観的に捉えられるようになることか、
批判の目をしっかり持つこと…、分からなくなりま
すが、今後は少し真剣に川柳に向き合ってみたく
思います。そして一日も早く皆さんに追いつけるよ
うに努力したいと思います。

◆エッセイ アベカルタ「偽川柳」

浜本大蔵（神奈川）

久しぶりです。コロナ禍ですっかり日常生活が変
わりました。経済的な効率、採算が全ての価値基準で、

医療・健康・衛生の公的体制を切り捨ててきた新自由
主義。そのしつぺ返しを今、受けているのかも知れ
ません。『九条の会・いせはら』の会報（NO.128号、
2020.5.9）の余白に載せた記事です。

× ×

『茶色の朝』一億総白地マスクで迎えます タイゾー
一世帯二枚のマスク一億枚が安倍さんからプレゼ
ントされるといふ。

一億総火の玉、一億総玉砕、一億総白痴、一億総
活躍、そして今、一億総白地。

まさに『茶色の朝』。全てが茶色だけになってしま
う物語。猫も犬も、新聞もラジオも人びとの服装も、
そして「朝」までも。

「茶色に守られた安心。すぐく快適な時間。逆らわ
ないでおりさえすれば面倒に巻き込まれることもな
く、生活も簡単になる。」

茶色はヨーロッパではナチズム・ファシズムの色
だといふ。

1億枚のマスク。せめて、通販に習って、「S・M・L」「白・赤・黒・ピンク」、それにワンポイント入りを望むなら「桜・菊・日の丸・ストライプ入りの星のマーク」を選べるようにしてほしかった。街に出るとみんな政府支給品の白マスク。無表情で誰が誰だかさっぱり。ああ、灰色の街。すごく快適！

洋風でくつろぐ安倍さん

ソファに腰掛けた安倍さんコーヒークップを片手に愛玩用の犬を抱いて寛いでいる。なぜソファなの？なぜなぜコーヒーなの？なぜ秋田犬でないの？

ほら、小学校『道徳』の教科書検定では、パン屋さんが和菓子屋さんに替えられたじゃないの。なんでもパンはニッポンの伝統食ではないということだったではありませんか。

せめて 4畳半の畳の上でちゃぶ台に座り、ニッポンの緑茶を啜る浴衣姿の安倍さんであってほしかった。

内閣総理大臣安倍晋三殿！

仕事がない、家がない、明日の生きる目当てがない。そんな緊急事態にゆつたりと寛いでいいの？

おたより

◆岩佐ダン吉さん（大阪）より

5月に入り府下の各地川柳社より句会「中止」から一転、「話と句会」の案内が増えてきました。考えてみると川柳界の仲間―要は川柳が好き、交流が好き、作品を発表し会報に掲載を喜びとする、まあ、そんな繋がりも川柳のパワー…。それが「天災」とも言うべき「コロナ禍」で、…誌上句会も川柳パワー。嬉しいことです。やがて事態も收拾「おう、元気やったか」そんな日が一日も早くと願いたいものです。それにしても、安倍さんの命運は、さあーあなた・私の一句で―

ほのぼの川柳

自動車に乗れて嬉しい子どもたち
 神田 鯛
 太鼓打つ娘の姿可愛いかな
 神田 鯛
 生き物に興味津々我が息子
 神田 鯛
 酔わないで酔った振りする苦勞人
 寿賀子
 かけがえない普通ですこれでよし
 東 爺
 この国で生まれた運で生きている
 東 爺

立ち入り川柳

大津波 花は枯れても 華が咲き
 地名Ⅱ 大津・那覇・長崎を詠み込む。
 穴あき川柳 (□に言葉を入れる)
 やせて□□ 鏡を見ると□□□顔
 答えⅡドガ、ムンク

作・辻寿賀子(東京)

『戦争前夜抄』

17

金子文子、自殺への疑問

周 立東爺

前号に紹介した大逆事件に連座した金子文子と朴烈のこと。死刑判決の後、恩赦で無期懲役となったが、大逆事件そのものが「法律を超越して処分しなければならぬ」とでっちあげられたものだった。恩赦決定の四カ月後にその恩赦を恥じて自殺したとされる金子文子のことであるが、本当に自殺だったのか？ 様々な疑問がでてくる。松本清張もその一人で「昭和史発掘」で検証を試みている。

検証の前に、金子文子の人となりなどをぞつてみたい。

文子の両親は貧しく、二人は籍も入れず、文子が生まれても出生届を出すことはなかった。文子は「無

籍者」として育つ。

学校へも行けなかったが向学心は非常に強かった。道端で拾った新聞紙の文字をなぞって文字を覚え、お情けで入れてもらった学校で学んだが、終業式は他の子ども達と違って薄っぺらい半紙を渡されただけ。終業式そのものが自分の侮辱のために用意されたものと感じたという。幼少期の文子はそんなことの連続だった。

父の妹が併合直後の朝鮮に住み、子どもがいなかったので引き取った。しかし差別と貧しさは変わらなかった。

作家・高橋源一郎氏が『何が私をこうさせたか』の一節を昨年十二月、ラジオで紹介していた。文子の人生の分岐点の瞬間でもあろうその部分を紹介します。(岩波文庫169頁)

× ×

「そっだ、いっそ死んでしまおう……その方がどんなに楽かもしれない」

こう思った瞬間、私は全くすくわれたような気がした。いや、全く救われていた。

私の身体にも精神にも力が漲って来た。萎えた手足がぴんとなって、わけもなく私は立ち上れた、空腹などは永久にわすれてしまったようであった。

十二時半の急行がまだ通らない。それだ。目をつぶって一思いに飛び込めばいい。

が、それにしてもこのままでは余りにも見窄らしい。(略)

私は踏切り近くの土手の蔭に隠れて着物を着替えた。前の着物はくるくると捲いて風呂敷の中に包み、土手脇の草叢の中に突込んで置いた。

土手の蔭に蹲って私は汽車を待った。だがいつまで経っても汽車は来なかった。やっと私は汽車がもう通過した後だということを知った。

(略)

「どうしようか……。どうすればいいのか……。」
澄みきった頭の働きは敏速だった。私はじきに今

一つの途を思い出した。

「白川へ！ 白川へ！ あの底知れぬ川底へ……」

私は踏切りを突っ切って駆け出した。土手や並木や高梁畑の陰を伝わって、裏道から十四、五町の道程を、白川の淵のある旧市場の方へと息もつかずに走った。

淵のあたりには幸い誰もいなかった。私はほっと一息ついて砂利の上に殫（たお）れた。焼けつく熱さにも私は何の感じもしなかった。

心臓の鼓動がおさまると私は起き上がった。砂利を袂の中に入れ始めた。袂はかなり重くなったけれど、ややともすればそれが滑り出そうであったので、



赤いメリンスの腰巻きを外して、それを地上に展げて、石をその中に入れた。それからそれをくるくると

捲いて帯のように胴腹に縛り付けた。

用意は出来た。そこで私は、岸の柳の木に掴まって、淵の中をそおっと覗いて見た。淵の水は蒼黒く油のようにおっとりしていた。小波一つ立っていなかった。じつと噴（みつ）めていると、伝説にある龍がその底にいて、落ちて来る私を待ち構えているように思われた。

私は何だか気味がわるかった。足がわなわなと、微かに慄（ふる）えた。突然、頭の上でじいじいと油蟬が鳴き出した。

私は今一度あたりを見まわした。何と美しい自然であろう。私は今一度耳をすました。何という平和な静かさだろう。

「ああ、もうお別れだ！ 山にも、木にも、石にも、花にも、動物にも、この蟬の声にも、一切のものに……」

そう思った刹那、急に私は悲しくなった。祖母や叔母の無情や冷酷からは脱れられる。けれ

ど、けれど、世にはまだ愛すべきものが無数にある。美しいものが無数にある。私の住む世界も祖母や叔母の家ばかりとは限らない。世界は広い。

母のこと、父のこと、妹のこと、弟のこと、故郷の友のこと、今までの経歴の一切がひろげられたそれらも懐かしい。

私はもう死ぬのがいやになって、柳の木によりかかりながら静かに考えこんだ。(略)

「死んではならぬ」と考えるようになった。そうだ、私と同じように苦しめられている人々と一緒に苦しめている人々に復習をしてやらねばならぬ。そうだ、死んではならない。

× ×

この『何が私をこうさせたか』は、裁判調書として作られたもので、後日、本人の希望で出版された。大逆事件の他の日本人被告は軒並み、判決後数日にして死刑を執行されているのに、文子と朴烈はなぜ、恩赦を受けたのか？

松本清張は『昭和史発掘』の中で「朴烈大逆事件」を次のように書く。(文庫143頁)

この事件の内容は、簡単にいうと、朝鮮人朴烈が、その内妻金子文子と共謀して、爆弾をもって摂政官（昭和天皇）を暗殺しようとしたことで爆弾の入手を準備中だったというほどのことである。しかし、準備とみるには何一つ具體性のないことだった。だが、兩人には大審院で大正十五年三月二十五日死刑の判決言い渡しがあつた。

兩人は判決をうけると同時に獄に下つたが、それから十日後の四月四日、「特典ヲ以テ死刑囚ヲ無期懲役ニ減刑セラル」との特赦をうけた。大逆事件で幸徳秋水のばあいは、恩赦からはずされた十二名は判決から六日目と七日目に死刑を執行せられ、難波太助のばあいは、判決の翌々日に死刑の執行がなされている。それに

らべて朴烈と金子文子とが恩赦になったのは異例だとして当時の右翼方面を刺激したのだ。

朴烈は千葉、秋田刑務所などで服役したが、金子文子は、恩赦の適用をうけた日から四カ月たらずのちの七月二十三日に、宇都宮刑務所栃木女囚支所で首をくくって自殺してしまった。

しかし、これだけなら時の内閣を倒すほどの道具にはならなかったであろうが、問題が大きくなったのはむしろ、判決前の予審中に東京地裁判事立松懐清が撮影した朴烈と金子文子が本をもち、彼の膝に座っているというポーズの写真である。

この朴烈と金子文子の恩赦は、時の内閣を倒すほどの大事件で、この事件を担当した石田基検事が平行して調べていた陸軍機密費不正事件があり、石田検事は変死している。

(つづく)

シベリア抑留の記録

「在ソ三年 生と死のドラマ」

故・秋山茂氏の遺稿より

19

終戦時ソ連軍の捕虜となった日本人七十七万人（ソ連側は五十万人と発表）、死亡者の数は五万数千人。終戦後二年たった一九四七年六月にはまだイルクツク市郊外で空腹と闘いながら伐採作業をしている。いつ日本に帰還できるか分からない。

「衣食足りて礼節を知る」

ある日の午後、夢中で茸を採っている処を運悪く通り掛かった四人連れのソ連軍将校に見つけられて了った。瞬間「しまった!」と思ったが後の祭りである。

四人連れの将校は笑い乍ら袋に入れた茸を私に捨てさせると大して叱ることもなく行つて了ったが間

もなく「茸を喰べることはならぬ」という命令が出されたため断念せざるを得なかったが、思うにシベリヤの茸には毒性というものがない。これは恐らく冬期の氷点下四、五十度という寒気が毒性を殺すのか或いは又失わして了うからだろう。とにかく私の場合、茸が大きな活力となったことは間違いない。けれども野草や茸で生命を維持し辛うじて死線を越へて引き揚げた日本人の多くは胃拡張といういまわしい消化器病を背負っていることも亦事実で「衣食足りて礼節を知る」という諺を身で体験した抑留生活の折々に垣間見た自然人としての断片はそれ以後の人生に大きな指針となって生き続けている。

9 相剋の根

入ソするまでの私は「日本人の血の中に流れている大和魂をいうものは永い歴史によって培われた正義というに相応しく他民族には真似の出来ない立派なものである」と信じていたが、国が戦いに敗れ、

囚われの身として異国に三年間生活するうちに、夫れが過信であったことを知ると共に、私の考へていた日本並びに日本人というものが足下から崩れつつあることに気付いた。

即ち有史以来敗戦という憂き目を知らない日本人の変貌振りに一瞬戸惑いさえ感じたが、漸がて時流という不動の力に人間個々の力や精神力というものが如何に無力で弱いものであるかを思い知らされ同時に又其処に数々の醜態を見た。殊に在ソ中、多くの日本人の言動が非常にソ連人に迎合的で、ソ連軍将兵に媚びへつらうさまは誠に腹立たしく情無いような思いにかられたのも一再でなかった。

特に大隊に一名配属されているソ軍の政治将校を取り巻く所謂アクナーブと呼ばれる十名余りの左翼思想をもつグループの連中が「自由と民主主義」を掲げ乍ら、我が物顔でのし歩く反面、他の日本人が秘している前歴や言動を摘発するため、汲々として

いるさまは正に「トラの威をかる狼」といった真に苦々しいものであった。

この中心勢力はハバロスクで発行されていた「日本新聞社」の首脳陣であったように思われた。事実この連中に睨まれたら宿願の「ダモイ」もふいになる虞があったから誰もが「当たらず触らず」であったのは無理からぬことであつたかも知れない。

ナホトカに着き連日の「人民裁判」

昭和二十三年（一九四八年）十月八日、イルクツク市を發つた私の乗つたダモイ列車が終着駅のナホトカに着いたのは十月十七日、それから乗船した二十一日までの五日間われわれは第一第二第三ラールと次々に移動させられたが、この間にラールゲルを管理する優秀なアクチーブの連中が反動分子の摘発を行い、われわれは毎日夕食後行われる「人民裁判」には半強制的に出席せねばならなかつた。広場に造られた舞台は幼い頃村祭りに田舎芝居が上演

された時の舞台と似たもので、反動分子と見られた人々（主として将校）が引き出され、広場を埋めつくした一般捕虜の前で一人一人逐一罪状を指摘し、糾弾する俗にいう「吊し上げ」で、私の知つた者では終戦前奉天に在つた捕虜收容所長をしていたという丸山中尉も裁判に掛けられたし、又ナホトカまで我々と一緒だつた元満州航空株式会社の技術課長野村伍長も此処から又何れかに連れ去られ乗船出来なかつたが、其他の人々がどのような制裁を受けたのかは判らない。

ナホトカに到着してから五日目の十月二十一日、最後の検査を了へた我々は悲喜交々の感慨を胸に秘め乍ら表面白痴美の様な顔をしてラールゲルを出発し、徒歩で小さな峠一つを越へて岸壁に出たが、この峠に通ずる道路の片側で現役部隊らしい日本人捕虜の一団がつるはしやシャベルを振つて土木作業をしていた。彼等は我々を見るや作業の手をとめて小

さな丘の上に集まり盛んに手を振り乍ら、何やら叫んでゐる。こちらからは「頑張れよ！」の聲が返へされた「迫り来る冬將軍を前に頑張つて呉れ」。私は心の中で祈つた。

岸壁に出た途端、そこに信洋丸（五八〇〇トン）と書いた日本の船が横付けされていた。おゝ、日本の船だ、日本の船だ！

ソ連軍將校の誘導で近寄つて見れば日本人船員がデッキから「ご苦労さんでした」と言つて、盛んに手を振つてゐる。「ご苦労さん」この言葉には実に千万無量の思いが込められてゐるように思われ、ぼーっと目の前が涙で霞み、熱い涙の一滴が足元に落ち、じーんとする胸のうづきは誰もが同じか涙顔のわれわれは暫くタラップの近くに佇んでゐると、先に乗船した三、四名のソ連軍將校と船長との引き継ぎが終るや待つ間もなく隊列の先頭から乗船しはじめたが、それにしてもなんと老朽化した船だろう。

ペンキのはげた痛ましい姿は祖国日本の窮乏を見せられたようで、今、引き揚げの喜びと入り混じつた複雑な重苦しく胸を締めつけられる思いでタラップを登つた。それでも遙るばる迎へに来て呉れた信洋丸！

私は忙しそうに行き交う船員の誰にも頭を下げ乍ら階段を降り割り当てられた場所に入るところり横になつて瞑目した。

暗くよどんだような空気を突き破るようにあわただしい足音や喊声を思ふすような騒音の中にあり乍ら、過ぎし抑留三年間の思い出の数々が鮮やかに脳裡に甦つてきた。

イルクック、パシキー、マリタ、そして異境に果てた結城善吉君の顔等々。

だが、この思い出は直ぐ消へて海を距てた故郷に、そして妻子の上に……。妻や子供達は無事に還れただろうか？
(つづく)

この連載も最終版に近づきます。編集後記参照。

編集後記を兼ねて

▼「緊急事態宣言」解除でも第二波、第三波が懸念されます。失業者が増え、生活ギリギリの方も多い。▼高齢者は「年金」



を大きく揺るがした。次回に松本清張の考察を紹介。▼秋山茂氏の連載は、今回で19回。原稿から計算するとあと2回で完結します。秋山氏の長

で辛うじて生きているが、若者は大変。▼戦争前夜抄の大逆事件。知れば知るほど権力の横暴が明らかになる。雰囲気は安倍日本会議政権の腐敗そのもの。▼写真は拘留中の当時の朴烈と金子文子のももの。この写真が政権

女・坂本富士子さんに「今だから話せることも多い」と聞いていたので、先日お亡くなりになったお母さんのことも含めて、寄稿をお願いします。乞うご期待。(編集員周立東爺)

6月例会のご案内 (毎月第4木曜日)

- ◆例会 6月25日(木) ◆投稿×切:22日(月)
- ◆課題「報」 3句以内 ◆自由吟:5句以内
- ◆自選吟、連作、エッセイ、川柳論、ご意見などもお願いします。川柳に関する資料などもご紹介下さい。
- ◆句報を持参下さい。例会で話し合います。
- 投稿 FAX(076) 254-0762
- メールアドレスは下段に。

郵送は
下段住所へ。

「和川柳社」会報
会員募集しています!

同人:4000円/年
投句/購読:2000円/年
★会報の他に、関連資料などもお送りします。

和川柳社 〒920-0335 金沢市金石東2丁目15-30 (渡辺 寛)

電話 FAX:076-254-0762 PC-mail:kananabe@popolo.org

携帯:090-9445-1302 携帯 mail:kan-wata@i.softbank.jp

振込先:北國銀行中央市場支店 #191 普通 640 「和川柳社」

発送に協力いただいています。

▼《食育のグリーンノート&土の音工房》オカリナ制作・上村彰